

公立大学法人山口県立大学 附属 郷土文学資料センターだより

アメリカ公演の思い出

米 本 太 郎 (山口鷲流狂言保存会)

山口県立大学から依頼を頂き、2月にアメリカのセンター大学で鷲流狂言の公演をさせていただいてからずいぶんと時間が経ちました。この公演のおかげで今年は取材や依頼公演が多くあり、振り返る余裕はこれまであまりありませんでしたが、少しずつ薄れていく記憶を振り返ってみようと思います。

これまで、国内では留学生向けのワークショップや公演を何度も行っており、それなりの反応を頂いていました。しかしそれは、日本に来て、日本に興味がある人たちに対してであり、実際にアメリカに行って現地の人たちにどのくらい受け入れられるのかという不安はありました。狂言は対話劇であり、言葉の意味を理解しないと難しいところがあります。打合せの段階で、字幕をつけるか、同時通訳をするかなどいろいろな意見がでました。実際、他の流儀の人たちが海外で公演するときは全文を英訳し、字幕で表示する、音声での同時通訳をする、どこで笑うなど、細かく親切に説明をするやり方が主流だと聞いていました。ただ、それでは私たちの演技をみるのではなく、字幕や通訳に意識が行ってしまうと思い、できるだけ日本で上演するのと同じ環境でやりたいと伝えました。そこで最小限の場面説明だけを字幕で表示するようにしてもらい上演することになりました。

アメリカに到着し、舞台設営の様子を見に会場に行くと、お願いしていた舞台装置（舞台四方の柱と橋掛り）が立派に作られていて感動しました。できることなら終わった後日本に持って帰りたいくらいのものでした。舞台スタッフの方は困ったことがあれば何でも言ってくれということ、通訳を介して伝えてくれました。遠慮していたら良いものはできないと思い、いくつかの無理なお願いをすると、その



▲ 「千鳥」上演の様子 (右・米本太郎 左・米本文明) 撮影・入江正敏



▲ ノートン芸術センター観客席の様子 撮影・入江正敏

大雪の影響で、地元小学生などと触れ合う機会が失われたことはとても残念でしたが、公演自体は、上記した現地スタッフや、一年かけて準備してくださった両大学関係者の皆様のおかげで無事終わることができました。

舞台に対する反応は日本とは大きく違い、素直に表現してくれます。言葉がわからなくても、動きの面白さや擬音語、繰り返し同じセリフをいうところなどはこちらが想像していた以上の反応をいただきました。日本人に対しては、馬鹿笑いは下品なので、

含み笑いくらいが狂言の笑いにはちょうど良いといつも言ってきました。そういった意味では、良くも悪くも大きな反応を頂いたことは、受け入れてもらえたことということで素直に喜び、しかし、演じる立場としては複雑な思いもありました。

最後に、センター大学ノートン芸術センターのステイブ・ホフマンさんに心から感謝の思いを伝えたいと思います。昨年の山口県立大学での公演の時に初めてお会いし、狂言をみていただきました。それから野田神社能楽堂を案内し、能舞台の構造などを説明してもらいました。後から聞いた話で、ホフマンさんはこの時にアメリカでやってもうまくいくと思われたそうで、実現に向けて尽力してくださいました。現地で行われたレセプションでは、私が言葉が通じないので現地の方に挨拶したくてもできないと伝えると、私が通訳するからといって、大学関係者やスポンサーの方々に引き合わせてくれました。ホフマンさんもスマートフォンの通訳機能を使ってでないと私ときちんとした会話ができないにも関わらず、話してくださいました。

合間に通訳を介してたくさんジョークも言ってくださり、おかげで安心して過ごすことができました。公演が終わったあと、連絡もできずお礼もきちんとできていませんが、ホフマンさんの大きさ、温かさのおかげで今回の公演が実現し、うまくいったのだと私は思っています。



▲ レセプションにて (右・ホフマン 中央・米本太郎 左・土村廣隆)
Photo by Kirk Schlea, courtesy of Centre College's Norton Center for the Arts

はじめての鷲流狂言米国公演を実現するにあたって

ロバート・シャルコフ (国際文化学部教授)

2015年2月に開催したセンター大学での鷲流狂言の公演はどのような経緯で実現されたのでしょうか。約3年前、本学がグローバル人材育成推進支援の拠点大学として採択され、地域の文化の価値及び可能性に気づき、それを世界に売り込むことができる「インターローカル人材」を育成しようとしたところで、学生にとって、何か具体的な活動や体験がなければ空想的なアイデアのままで終わってしまうと心配していました。その悩みを元同僚に打ち明け、何か具体的なことができないかと話し合い、そのことが今回の公演のインスピレーションとなりました。

丁度その頃、本学と学術交流協定を提携している米国のセンター大学を訪問することがあり、同大学のノートン芸術センターのホフマン・センター長に会う機会がありました。そのセンターでは多岐にわたり、年間100以上の公演を上演しています。本学のグローバル人材の卵である学生たちが関わって、米国での鷲流狂言公演と大学生や地元の小学生などに対するワークショップ等を実施するという漠然としたアイデアをホフマン氏に話してみたところ、氏がとても興味関心と理解を示してくださり、自信ができました。



▲ ワークショップの様子 撮影・入江正敏

日本に戻ってから勇気を出し、鷺流狂言保存会の顧問を勤めている稲田秀雄教授に話をしてみたところ、拒否はされず、なおさら自信が湧きました。稲田教授を通じて保存会に打診してもらおうと、保存会も私の話を聞いてくださるとのこと。ひょっとしたらこれは実現できるかもしれないと思うようになりました。

しかし、ホフマン氏が狂言を実際に見たことがないということもあり、何とか本学まで来て、実際に見てもらうことができないかと考えました。一方、その旅費等はどこから出せるのかという新たな悩みが出てきました。センター大学と交渉した結果、教員交流の一環として派遣してもらおうことになり、今回の公演の約1年前の1月に開催された鷺流狂言大学公演の日程と合わせて来山していただき、公演と野田神社の能舞台を見てもらうことにしました。

公演前に稲田教授による鷺流狂言の公開講座があり、通訳を付けてホフマン氏に受講してもらいました。また、公演演目の英語概要を手に入れ、事前学習をしてもらったうえで、公演に臨みました。しかし、第一演目が終わったところ、ホフマン氏の反応はあまり良くなかったため、とても心配になりました。そこでホフマン氏は舞台を全体的に見たいと言われ、公演が開催された本学の講堂の二階の、他には観客のいない席まで移りました。次の演目がスタートし、演技中に私がところどころで通訳を入れることによって、話の流れをつかめたホフマン氏は大声で笑いました。ホッとした瞬間です。

その後、保存会の案内で野田神社の能舞台を見せていただき、ノートン芸術センターの小舞台の構造と似ていたこともあり、ホフマン氏の中には具体的なイメージが湧き、帰りの車の中ではセンター大学での公演を行うことを前提にどのように実現していくかという具体的な話になりました。

しかし、私にはホフマン氏が実際につかかった言葉の壁をどう超えるかという新たな問題が見えてきました。保存会とホフマン氏もこの点がとても気になっていたようです。解決策についてホフマン氏と保存会と私がお互いに色々なアイデアを出し合いました。例えば、ITの端末を用いて解説することができないか、オペラのようにステージの上に字幕を映すことができないか、ヘッドフォンを使って同時通訳を行うことができないかと様々なアイデアが出てきました。しかし、保存会としては観客が翻訳されたセリフや英語による解説に注目してしまい、舞台を見てももらえないだろうと心配されていました。

最終的に保存会、ホフマン氏、私の三者が合意できた対策は3つの異なった方法を組み合わせたものでした。それは、まず、観客にはなるべくわかりやすい英語による各演目のあらすじを記載したプログラムを配布したうえで、各演目の上演前に私が通訳しながら稲田教授のより突っ込んだ短い解説を行い、上演中には舞台の右上に大きなスクリーンを設置し、それに英語による場面転換のキーワードのみを映すことにしました。

通常でもこういった準備には時間がかかりますが、当時、稲田教授と保存会の米本太郎氏は日本に、私は滞在研修先の米国シカゴ近辺の大学にいました。また、ホフマン氏は私のいる場所と1時間ほどの時差のあるケンタッキー州にいました。日本文と英文の内容に関する合意形成には時間がかかったうえ、電子メールでのやり取りでしたので、忍耐も必要でした。四者が実際に足並みを揃えたのは、全員がセンター大学で合流した公演当日より3日前でした。しかも、あいにく50年ぶりの大雪に見舞われ、きちんとした打合せができたのは、公演の前日でした。稲田教授と私が各演目のゲネプロを見守りながら、スクリーンに映す場面転換の表現や言い回しをチェックしつつ、スライドを切り替えるタイミングを計ってみました。こういった作業や調整が本番直前まで続き、どのようになるかと心配していましたが、本番では練った作戦が見事に成功し、各演目において、笑い声が絶えず、会場が大いに盛り上がりました。今回の公演を提案してから実現するまでは約2年かかりましたが、地元文化の海外への紹介や売り込みの可能性が見えてきました。大変有意義な2年間でした。

今度機会があれば、インターローカル人材の卵たちが今回の公演演目の間に企画・実施した他の山口県の文化や歴史に関する催し物を紹介したいと思います。

寄贈雑誌 (2015年5月～2015年11月)

『文芸山口』第224号,228号,230～231号,245号～250号,251号～252号,227号,229号,282号～283号,308号,321号～323号(山口県文芸懇話会)・『其桃』第845号～851号(其桃発行所)・『嘉村磯多顕彰会だより』第7号(嘉村磯多顕彰会)・『地橙孫新聞』第14号(兼崎地橙孫顕彰会)・『あらつち』第699号～701号(あらつち社)・『佐波の里』第43号(防府史談会)・『山彦』第127号～130号(山彦発行所)・『大内文化探訪』第33号(大内文化探訪会)・『秋芳町地方文化研究』第51号(秋芳町地方文化研究会)・『火山群』第53号(岩国文学協会)・『颯』第99号～100号(颯事務局)・『風響樹』第46号(風響樹同人)・『ふるさと通信きずな』第1号(ふるさと紀行編集部)・『やまなみ』第32号(やまなみの会)

寄贈図書 (2015年5月～2015年10月)

山口大学人文学部『山口大学所蔵和漢古典籍分類目録續』・柿村きよ美『詩句集 卒寿の春』・上野燎・さち子『相聞句集 山口にて』・平山智昭『戦国歴史秘話 二の丸残照～毛利秀就公 出生の謎解き～』・中原中也記念館『萩原朔太郎と中原中也』・平佐隆雄『竹群の音』

第8回 鷺流狂言 in 山口県立大学

恒例の鷺流狂言公演が、今年度も開催されます。

日時：平成28年1月24日(日) 13時30分開場／14時開演

場所：山口県立大学 講堂(桜園会館)

プログラム：「棒しばり」^{こうやくねり}「膏薬煉」^{ふたりだいみょう}「二人大名」

※入場無料(申し込み不要)



編集後記

▼今号は、本年2月19日(木)にアメリカのセンター大学で開催された、鷺流狂言の公演についてのレポートを2名の関係者からお寄せいただきました。▼米本太郎氏はまさに演者でいらっしゃる、これからの鷺流狂言を背負っていく人物の一人です。舞台上のみならず舞台裏でも、様々な工夫がこらされていたことが分るとともに、芸能がことばの壁を超えた時の興奮がひしひしと伝わってきます。また、こうした公演が多くの人々の協力によって実現したことへの感謝も綴られ、今回の公演をとりまく雰囲気がとてもよかったことが窺えます。▼さらに、本公演のコーディネーターとして陰に日向に大活躍された本学のシャルコフ先生に、ことの発端から当日の様子までをご報告していただきました。▼今回の海外公演はもちろん大学間交流・日米文化交流としても意義深いものですが、大学としては教育としての意味合いも多分に含まれたプロジェクトであったことが理解されます。本学では学生に様々な「場」を与えることで、教室で学ぶこととはまたひと味違った学習を促しております。▼なお、当日はセンター大学内で当センター所蔵の鷺流狂言資料も展示されました。▼最後になりますが、お二方をはじめ、本公演を支えてくださった全ての方に心より感謝申し上げます。(K)